

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 4月 19日現在

機関番号：13902  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2009～2011  
 課題番号：21520246  
 研究課題名（和文） アメリカにおける大衆向けロマンス出版事業とその影響に関する文化論的研究  
 研究課題名（英文） A Cultural Study on the History of Popular Romance Novels in the United States  
 研究代表者 尾崎 俊介  
 (SHUNSUKE OZAKI)  
 愛知教育大学・教育学部・教授  
 研究者番号：30242887

研究成果の概要（和文）：当該テーマについて各種文献を調査・研究した結果、以下のような論文が研究成果として発表された：(1)「すべてはロマンスから始まった：文学史から見たハーレクイン・ロマンス」（ハーレクイン・ロマンスの出版経緯とその文学史的意義を総論としてまとめたもの）。(2)「吸血鬼を「ロマンス」する：ヴァンパイア・ロマンス *twilight* についての一考察」（1990年代以降、なぜアメリカで吸血鬼を主人公にしたロマンスが流行したのかを分析したもの）。(3)「シークの時代：20世紀初頭の「砂漠捕囚ロマンス」」（20世紀初頭のイギリスで、アフリカ北部や中東の砂漠を舞台にしたエキゾチックなロマンスが流行したことの理由を分析したもの）。

研究成果の概要（英文）：

As a result of this study on popular romance novels, papers on the following topics were published: (1) "Everything Begins with Romance: The History of Harlequin Romance," which explains how this Canadian popular romance series known as "Harlequin Romance" was established and how it acquired a large readership in the United States; (2) "Romancing the Vampire: An Essay on Stephenie Meyer's *twilight*," in which the subject of the "vampire romance boom" in 1990s America is explored; (3) "The Age of *The Sheik*," which analyzes the popularity of the so-called "Captivity Romances" in the UK in the 1920s.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：米文学、大衆文学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は、これまでアメリカにおけるペーパーバック本の出版史について研究を行ってきたが、その過程で、1970年代以降のアメリカにおいて、「ハーレクイン・ロマンス叢書」に代表されるような大衆向けロマンスの一大ブームが巻き起こっていたことが判明した。しかし、このような大衆文学上のブームは、一般的なアメリカ文学史の中では完全に無視され、その文化史的な意義についても看過されがちである。

しかし大衆文学もまた文学であり、その圧倒的な読者層の大きさからすれば、それはいわゆる「高尚な文学」以上に「文学的インパクト」を持ち得るのではないだろうか？

このような問題意識に基づき、本研究では、アメリカにおける大衆向けロマンスの出版史とその文化史的意義について、独自の調査を進めることとした。

## 2. 研究の目的

1970年代以降、アメリカで大流行したペーパーバック・ロマンス叢書「ハーレクイン・ロマンス」の出版経緯を明らかにすると同時に、大衆向けロマンスなる文学ジャンルがいかにして発生・発達し、今日どのような形態をとって存続しているのか、といったマクロ的視点からも調査を進め、もって「大衆向けロマンス」という文学ジャンルそのものを、アカデミックな観点から再評価することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は以下に示す3つの段階を踏んで進められる。

①「ハーレクイン・ロマンス叢書」の出版経緯について可能な限り多くの一次資料・二次資料を収集・分析し、この叢書が如何なる形で誕生し、その後アメリカのロマンス読者層の中に浸透していったかを調査する。

②ハーレクイン・ロマンス叢書以前、そもそも「ロマンス小説」が如何なる形で発生し、発展してきたかを調べ、この特異な文学ジャンルそのものの誕生・発展経緯を調査する。

③前記①・②の調査結果を踏まえ、ハーレクイン・ロマンスの流行現象を、ロマンス文学の文学史の中に位置づけると同時に、ロマンスという文学ジャンルが、歴史的に見て、非常に多くの女性読者層を惹きつけてきたことの意義について考察を進め、アカデミズムの中では軽視されがちな「(大衆向け)ロマンス小説」の文学的、ないし文化的意義について肯定的に再評価する。

## 4. 研究成果

本研究の結果、研究成果として発表された個々の論文・執筆物、あるいは学会における

口頭発表について、その内容を簡略に記す。

(1) 啓蒙的執筆物「すべてはロマンスから始まった：文学史から見たハーレクイン・ロマンス」(洋泉社編『ロマンスの王様 ハーレクインの世界』所収)は、主としてハーレクイン・ロマンス叢書の創刊経緯と、その意義について明らかにしたものである。

「ロマンス小説」なる文学ジャンルは18世紀にイギリスで誕生し、その後19世紀の貸本産業の隆盛と共に主として女性読者層を開拓していったわけだが、そのイギリス流のロマンティックな小説は、アメリカにおいて若干の質的变化を遂げ、かの地においては貧しい勤労少女が悪漢に翻弄される「悪漢小説」となって流行したばかりか、それがまたさらに「悪漢に誘惑されないためにはどうすればいいか」を説く「道徳小説」へと変化し、その結果アメリカは、20世紀の前半まで、本来の意味でのロマンス小説が存在しない、特異な市場を形成することとなる。

一方20世紀半ばにカナダで創立されたハーレクイン社は、イギリスのロマンス専門出版社であるミルズ&ブーン社が発行する大衆向けロマンス小説をカナダに輸入してペーパーバック化し販売する業務を始めるのだが、1963年にこのロマンス叢書がアメリカ市場に進出すると、それまでアメリカではイギリス流の正統的なロマンス小説が存在しなかったこともあり、たちまち当地の女性読者層の心を掴み、かの地で一大ブームを巻き起こす。

その後、ハーレクイン社は、二代目社長のW・L・ハイジーの指揮の下、ロマンス小説の均質化と大量生産を押し進め、ロマンスという一文学ジャンルを「産業」として成立するまでに育て上げるのだが、これは同時にライバル出版社の参入をも促すこととなり、アメリカにおけるロマンス小説の流行を極限まで高めると同時に、「ロマンス戦争」とも呼ばれるライバル出版社同士による壮絶な競争を引き起こすことにもなる。

そしてそのロマンス戦争を勝ち抜いたハーレクイン社は、今なお、アメリカにおける大衆向けロマンス出版の王者として君臨しているわけだが、本稿では、以上述べてきたようなハーレクイン・ロマンス叢書の創刊・発展経緯を概括しつつ、その過程で見えてきたロマンス小説という文学ジャンルの際立つ特色、すなわち「女性読者は、ロマンス小説を読み飽きない」という驚くべき事実と、そこから演繹される「ロマンス小説は同種・同類のものをどれほど量産しても売れ続けるため、産業になり得る」ということを明らかにし、もってロマンスという文学ジャンルが持つ特殊性を指摘した。

(2) 論文「吸血鬼を「ロマンス」する：ヴァンパイア・ロマンス *twilight* についての一考察」(『外国語研究』第 44 号所収)は、20 世紀末から 21 世紀初頭にかけて、アメリカで大流行した吸血鬼をヒーローに据えたロマンス小説、いわゆる「ヴァンパイア・ロマンス」を取り上げ、その文化的事象の背景にあるものを探ったものである。

一般に大衆向けロマンス小説のヒーローは、容姿・体格に優れ、頭脳明晰、社会的な身分としても上流階級に属し、しかも巨万の富を持つ、といったように完全無欠の存在として描かれることが多い。このようなヒーロー像を表現する言葉として「アルファ・メール」というものがあるが、少なくとも 1970 年代のハーレクイン・ロマンス・ブーム以降、1980 年代半ばまでは、ロマンス小説の主演と言えばアルファ・メールを指したのである。

ところがこのようなアルファ・メールの全盛期が長く続いたことに対する反動もあり、また男女同権という概念の浸透に伴って、弱い立場のヒロインをあらゆる面で凌駕し圧倒するヒーローのあり方が疑問視され始めたこともあって、1980 年代後半からは、むしろヒロインと同等の立場に立つ穏やかなヒーロー像、すなわち「アルファ・メール」の対極にある「ベータ・メール」が好まれ出す。

しかしベータ・メールの全盛期は、さして長くはなかった。というのも、やはりロマンス小説のベースにあるのは「シンデレラ・ストーリー」であり、自分よりも遙かに高いステータスにいるヒーローが、ヒロインの持つ愛の力に負け、かくしてヒロインの前に膝を屈して求婚するというところにこそ魅力があるのであって、その前提を形成することのできないベータ・メールは、ロマンス小説のヒーローとしては役不足なのである。

そして 1990 年代において、新たなアルファ・メール・ヒーローへの希求が高まったロマンス業界が目をつけたのが、「吸血鬼」だった。

実はアメリカではそれ以前から「パラノーマル・ブーム (=超人ブーム)」の一環として「吸血鬼」がクローズアップされ、吸血鬼を主人公に据えた各種若者向け小説が次々と登場していたのだが、そもそも圧倒的な力によって人間を凌駕するという点で、吸血鬼はアルファ・メールの基本的な条件を満たす。だとすれば、吸血鬼をヒーローとして、人間のヒロインとの間の恋を描く「ヴァンパイア・ロマンス」が、アルファ・メールの不在を嘆いていたロマンス読者によって歓呼の声を持って迎えられたことは言うまでもないだろう。

しかも、吸血鬼ヒーローには、従来型のアルファ・ヒーローにはないメリットがあった。吸血鬼ヒーローは、吸血鬼であるがゆえに、

愛するヒロインに近づきすぎると、吸血鬼としての欲望に負け、彼女の血を吸いたくなってしまうため、どれだけ彼女の事を愛していたとしても、可能な限り自制し、紳士的にふるまおうとする。すなわち、吸血鬼ヒーローは、本質的にはアルファ・メールとしての素養を十全に備えながらも、常日頃はベータ・メールのように、紳士的かつ穏やかにヒロインに接しようとするのであって、いわば、アルファ・メールとベータ・メールの美点だけを合わせたような、究極のヒーロー像を作り上げることに成功したのである。

このように本論は、近年のアメリカにおけるヴァンパイア・ロマンスの流行という現象をとらえ、その実態を明らかにすると同時に、その背景にあるロマンス小説の変遷を読み取ることで、なぜこのような新手法のロマンスが流行するに至ったかを解明した。

(3) 論文「シークの時代：20 世紀初頭の「砂漠捕囚ロマンス」」(『ことばとコミュニケーションのフォーラム』所収)は、20 世紀初頭のイギリスにおける「砂漠捕囚ロマンス」の流行という現象を取り上げ、そうしたロマンス小説がなぜその時代のイギリスで流行したのか、その背景を探る、というものである。

「砂漠捕囚ロマンス」なるものの流行の先駆けとなったのは、E・M・ハルが書いた『The Sheik』(1919)という作品なのだが、サハラ砂漠に君臨するアラブの族長とイギリス人女性の恋を描いた本作は、裕福な郷紳がヒーローになることの多かったイギリスのロマンス小説の常識を覆し、若く荒々しいアラブ系のヒーローを提示したこと、さらにルドルフ・ヴァレンチノというエキゾチックな顔立ちの俳優を使って映画化されたことなどが相俟って、イギリスに「砂漠の恋の物語」のブームを作り上げることとなる。

しかし、『シーク』の人気、あるいは本作に追従して次々と出版された「砂漠捕囚ロマンス」の人気には、より根源的、かつ時代的な背景があった。というのも、ヴィクトリア朝末期のイギリスでは、『シーク』というフィクションの誕生以前から、女性冒険家が次々とアフリカやアラブの砂漠を冒険するという現実の出来事が次々と起こっていたからである。事実、『シーク』という小説自体、実在する高貴な女性、ジェーン・エリザベス・ディグビーがアラブの某族長と結婚した、当時としてはセンセーショナルな実際の出来事をモデルにしていた。

つまりヴィクトリア朝の厳しい道徳律と、男性中心の家父長制度がまかり通る 19 世紀末から 20 世紀初頭のイギリス社会の中で閉塞感を感じていた女性たちにとって、そうした社会的な縛りを振り捨てて、アフリカやアラブなど外部の世界に飛び出していく女性

冒険家の姿は、ある意味、憧れの対象であったのである。そして、イギリス以外のエキゾチックな場所で、イギリス人男性とはまるで異なる世界観の中で生きている外国人男性と恋に落ちたいという願望が、当時のイギリス人女性の間で蔓延していたのだ。そして図らずもそうしたイギリス人女性の「逃避願望」を『シーク』なる小説が満たしてしまったことが、この時代における「砂漠捕囚ロマンス」の異常なまでの人気の背景となっていたのである。

このように本論は、『シーク』のモデルとなった実在の人物にまつわる史実などにも目配りしながら、ロマンス小説の「逃避文学」としての側面に着目し、ロマンス小説という文学ジャンルが、それぞれの時代において、女性読者に逃避的な安息を与えていたことの一つの証左を提供した。

(4) 論文・執筆物以外に、本研究の成果公開の機会として、以下のような学会発表を行った。

①2010年10月2日に行った金城学院大学大学院英文学会における研究発表、「すべてはロマンスから始まった：ハーレクイン・ロマンスの文化史」では、既述したハーレクイン・ロマンス叢書の創刊経緯とその発展、さらにロマンス小説という文学ジャンルの特殊性などについて、啓蒙的解説を試みると同時に、聴衆の多くを占める大学院生を念頭に、このようなテーマを思いつくに至った経緯や、研究方法の紹介などを通じ、文学作品を文化論的に研究していくことの意義や方法論を紹介した。

②2010年10月30日、慶應大学英文学会において行われたシンポジウム「[耳]学問のススメ：音読、朗読から黙読へ」では、これまでに行ってきたロマンス小説研究の成果を踏まえ、元来、ロマンス小説という文学ジャンルが、文学的には一段低いものと看做されてきたこと、また身分の高い男性と身分の低い女性の結婚を描くという点で、社会秩序を破壊するもの、あるいは、女性に結婚への過度の期待を抱かせるものとして、決して「良書」とは考えられてこなかったこと、さらに、だからこそロマンス小説に魅せられた女性読者たちの多くが、これらの本を人に隠れて黙読するのを常としたことなどを紹介し、これらの事実を、本シンポジウムのテーマと絡めながら、「女性が本を読む」とことと「黙読」の習慣との関連性を指摘した。

(5) 本項の最後に、3カ年に亘る本研究についての反省と、今後の展望を記しておく。

当初の計画では、3カ年の研究期間のうち、最初の2年を調査・研究に費やし、最終年度となる3年目については、単発の論文の発表

や学会発表を控え、研究書(単行本)の執筆に専念することを目指していた。実際、その計画に従って努力してきたわけだが、残念ながら最終年度が終了する前に、研究成果を単著の研究書として公にすることまでは出来なかった。このことについては、大いに反省している。

ただし、当初予定していた研究書の執筆は、既に8割方は終了しているので、今後約1年の予定で執筆を継続し、その後なるべくすみやかに出版社との契約に結び付け、最終的な研究成果の公表をしたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①尾崎 俊介、「吸血鬼を「ロマンス」する：ヴァンパイア・ロマンス *twilight* についての一考察」『外国語研究』(愛知教育大学外国語外国文学研究会)第44号、2011年、45-64、査読無。

[学会発表] (計2件)

①尾崎 俊介、「すべてはロマンスから始まった：ハーレクイン・ロマンスの文化史」、金城学院大学大学院英文学会、2010年10月2日。於金城学院大学。

②尾崎 俊介、他3名、「シンポジウム：「耳」学問のススメ：音読、朗読から黙読へ」、慶應大学英文学会、2010年10月30日。於慶應義塾大学三田キャンパス。

[図書] (計2件)

①尾崎 俊介、「すべてはロマンスから始まった：文学史から見たハーレクイン・ロマンス」、(洋泉社編集部(編)『ロマンスの王様 ハーレクインの世界』(洋泉社・2010年)所収、142-150)。

②尾崎 俊介、「シークの時代：20世紀初頭の「砂漠捕囚ロマンス」」、(安武知子編著『ことばとコミュニケーションのフォーラム』(開拓社・2011年)所収、223-234)。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

尾崎 俊介 (SHUNSUKE OZAKI)  
愛知教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：30242887

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者 ( )

研究者番号：